

願いの叶った黄幡さん

昔、昔の話じゃ。惣森の「さねくに」から、「よりぎね」へ行く道は、その当時は、ここらあたりじゃあ、たった一つの街道でのう。人々が荷物を背負うたり、牛や馬の背中に荷を載せて行ったり来たり、それは、それは賑やかなことじゃった。

その街道沿いに黄幡さんとよばれるお堂があった。



ところが、いつのころからか、旅人がこのお堂の前を通る時に限って、悪いことが起こるようになった。



ある者は、背中に堅く縛っておいたヒモが急にほどけて、荷物がばらばらになって落ちた。

またある者は、荷物を運んでいた馬が、お堂の前から急に動かんようになり、無理矢理引っ張りよったら、馬に蹴られたそう。

その他にも、ここに来て急にお腹が痛くなった者や、自分がどこへ行こうとしていたのか分からなくなった者などが次々出てくる。

これはきっと、何かの祟りが起きているのに違いない。このままじゃ、この道をこわがって誰も通らんようになる。早う、何とかせにゃあいけんと、村人が集まって相談した結果、神主さんをお呼びしてお祓いをしてもらうことにした。

さて、そのお祓いの日のことじゃ。村人たちは全員黄幡さんの前に集まり、神妙に並んで座った。神主さんがうやうやしく祝詞を読み始めた、そのとき…。

にわかに辺りが暗くなり、ヒューッと冷たい風が吹き始めた。



突然、神主さんが村人の方に向き直ると、それまでとは全く違った怖い形相になり、腹の底から絞り出すような野太い声で語り始めた。



「村人たちよ、よく聞け。お前たちは、高い所にあったワシのお堂を、こんな低い所に下ろしてしもうた。それも八幡さんよりも下に置いた。それがはがゆうてかなわん。そもそも、黄幡は八幡さんよりも高いところに祀るものじゃ。せめて八幡さんと同じ高さに祀れ。そうすれば厄（わざわい）も消えるであろう。」

村人は、びっくり仰天、平身低頭、全身わなわな震えながら神主さんの、いや黄幡さんの怒りの声を聞いた。

しばらくして、村人たちがおそるおそる顔を上げてみたら、周囲はいつのまにか元の明るさに戻り、風も止み、目の前にはいつもの光景が広がっていた。ところが、神主さんの姿がどこにも見当たらない。はて、神主さんはいったいどこに行かれたんじゃ？と探しているとお堂の後ろの方で気を失って倒れておられた。



急いで神主さんを助け起こしてみんなで介抱した。しばらくして我に返った神主さんは、祝詞を読み始めたまでは覚えているが、その後、自分にいったい何が起きたのか全く覚えてないという。

黄幡さんの乗りうつった神主さんが、神がかりとなってご神託を下されたのだ。全員、確かに黄幡さんの声を聞いた。荒々しい黄幡さんの怒り声が、今も耳の奥深く残っている。



「低いところに下ろされた」
「八幡さんよりも低いのがはがゆい」
というような話だった。

そういえば…と、村人たちには思い当たることがあった。

数年前の大雨が降った時のことだ。大番谷で、突然ゴーっという大音響とともに山津波が起きた。多くの田畑が流されて大きな被害が出た。そのとき、大番谷

の一番高いところに祀ってあった黄幡さんも一緒に流されてしもうた。

しかし、不思議なことに、これほどの山津波が起きたのに、人の命が失われることはなかった。

さて、その黄幡さんのお堂はというと、大破していたが、大川の中ほどにある「ひさげ岩」と呼ばれる大岩に引っかかって止まっていた。村人は、黄幡さんが身代わりになって、村人の命を助けていただいたのだと感謝し、みんなでお堂を拾い上げて、再建することにした。

しかし、元あった場所は、高い山の上だ。あがな高いところまで運び上げるのはしおうてかなわん。どがあしょうかのうと相談した結果、元の高い場所じゃなくても、街道沿いでもええんじゃないかということになり、今の所に置いたのだ。

黄幡さんは、八幡さんよりも低いところに下ろされたのがよほど気に入らなかつたらしい。それで、はぶてて旅人に八つ当たりをしよりんさったんじゃ。



村人は、すぐに黄幡さんのお堂を元の場所に戻すことに決めた。しかし、元あった場所はあまりにも遠く、あまりにも高い。かりに運び上げることはできたとしても、お詣りにも行けん。お詣りに行かんかったら、黄幡さんがまたはぶててかもしれん。

そこでまた村人たちは集まって相談した。

「黄幡さんも『せめて八幡さんと同じ高さに祀れ』と言うちゃったじゃないか。同じ高さなら許してくれてじゃろう。」

「そうじゃ、そうじゃ。八幡さんの隣で、仲良く並んでもらいましょうや。そうしてどちらも同じように大切にお守りしましょうや」

「まてまて、そうは言うてもものう、まったく同じ高さじゃあ、またはぶててかもしれんでえ。どうじゃろう、同じ境内でも、ちょこっただけ八幡さんより高い所に鎮座していただくことにしたら」

「なるほど、そりゃあええ考えじゃ」ということになり、八幡さんの境内に黄幡さんを並べて再建したが、その時、ほんのちょこっただけ八幡さんよりも高い場所に設置した。



それからもしばらくは、黄幡さんがはぶてて、また何か災いを起こしてんじゃないかと、村人はびくびくして暮らしていたが、幸いに街道を通る人にも、村人の生活にも、その後、災いは起こらなくなった。

黄幡さんも、八幡さんよりちょっぴり高い所というのが気に入ったみたいで、ようやく心鎮られたらしい。

「それにしても、黄幡さんは神様なのに、子供のようにすねる神さんじゃのう」と村人は噂し合ったということじゃ。

イラスト：入澤良枝